
聖魔戦記外伝 1 神官姉妹と王子様

金城 ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖魔戦記外伝1 神官姉妹と王子様

【Nコード】

N0631D

【作者名】

金城 ヌウ

【あらすじ】

孤児院で出会った姉妹は王国のお家騒動に巻き込まれる。二人は王子を守るのか。 聖魔戦記前奏曲という作品の外伝作品です。本編を読まなくても楽しめます。というか、本編を読むなら、後々のために読んでおいたほうがよいかもという作品（笑

o p o 1 : 出 会 い (前 書 き)

実は、本編はまだ3部までしか更新していなかったりして(笑

oppo1: 出会い

「お前、魔族だろ」

「黒い髪と目をしているヤツなんて、見た事ない」

「出ていけよ。お前みたいのが居ていいところじゃないぞ」

まだ10歳に満たないであろう少年達が、さらに幼い少女を取り囲んでいる。

少年達の言葉は容赦なく少女の心をえぐる。しかし、少女は下を向き。ただ服の裾を握りしめている。

「だからお前の父ちゃんも母ちゃんも、殺されたんだろう」

その言葉を聞いた少女の動きは速かった。大声を上げながらその言葉を放った少年にタツクルし足をかけて地面に倒す。そして少年の上に馬乗りになって顔面にパンチを叩き込む。1発、2発、3発、4発目で、我に返った残り2人の少年が少女を羽交い絞めにして引き離す。

「父さまと母さまの悪口を言うな！ 父さまと母さまは命がけて私を守ったんだ！」

「うるさい。しっかり捕まえている！」

顔面をしたたか殴られた少年が身動きできなくなった少女の腹を殴る。更に床の上に崩れ落ちた少女に3人がかりで暴行を加える。少女は言葉すら発さず丸くなって耐えている。

「何をやっているの！」

3人の少年が振り返ると、その視線の先にはダークブラウンの髪と瞳をした少女が右手に木刀を持って立っていた。

「リア…… まずい、逃げるぞ！」

「逃がすか！」

逃げようとした少年達を、リアと呼ばれた少女が追いかけて後ろから木刀でぶん殴る。

「後ろからなんて卑怯だぞ」

「女の子相手に、3人がかりでひどい事するやつが言うな！」

更に殴った。結局、少年3人はさんざん木刀で殴られたあげく、リアによって縛り上げられた。

その後ろで少年たちに暴行を受けていた黒髪の少女が、よろよろと壁にもたれるようにして立ち上がる。

「大丈夫？」

リアが少女に尋ねる。しかし、少女はリアをにらみつけ。

「別に…… 助けて…… なんて、言っていない」

よろよると2、3歩、歩き倒れる。

「ちよっ、ちよっといきなり倒れないでよ」

倒れた黒髪の少女を抱え、リアは途方にくれた。

oppo1: 出会い(後書き)

実はこの作品、3話ぐらいまで以前UPしていましたが。諸事情により一度削除しましたが。

たぶん、本日中に全てUPするかもです。
あくまで予定ということぞ。

目を開くと見慣れない石造りの天井が見えた。少しだけ考えて納得した。

両親を殺されて孤児となった自分を、村長がガイア教の運営する孤児院に連れてきたのだ。

身体を起こそうとすると、全身に激痛が走った。思わず声が漏れる。

「あ、気が付いた」

声と共にダークブラウンの髪と瞳をした少女が現れた。確か、リアと呼ばれていた少女だ。

「気分はどう？」

「……」

「お腹は、空いてない？」

「……」

「何か言っつてよ」

「……」

はぁ、とリアはため息をついた。

「なぜ、助けたの？」

沈黙していた黒髪の少女がリアに、小さな声で聞く。

「やっと、しゃべったね。あんなところ見たら普通助けるでしょう？」

「そう……」

また沈黙が支配する。

「なにか辛い事があったんだね。でも、あの時言っていたよね。父さまと母さまは命がけで私を守ったんだって、外まで聞こえたよ。

それが本当ならあなたは生きなきゃ、ね。生きて幸せにならないと駄目なんだよ。それが生きているあなたが、やらなきゃいけないことだから」

黒髪の少女の黒檀のような黒い瞳に、みるみる涙が溢れる。少女は頭から毛布を被った。

部屋の中に、少女のすすり泣く声だけが響く。

リアは少しだけすすり泣く声が落ち着いた頃に声をかけた。

「そっいえば自己紹介まだだったよね。私、フェンリア・ヒルデガルド。みんなはリアと呼ぶわ、あなたは？」

「ルノア、ルノア・ティア」

「じゃあルノア。私たち姉妹にならない。私も一人なの。事故だったのだけだね。もう一人は嫌。どうかね？」

ルノアが毛布から顔を出し頷いた。

「ルノア、あなたも忘れないで私達は一人じゃない。私にはあなたが、あなたには私がいる。忘れないで。ね？」

o p o 2 : 契り (後書き)

第2話投入。

お暇なら暇つぶしにお付き合ってください。

o p o 3 : 姉妹 (前書き)

今回から、タイトルの内容に突入します。

畑に囲まれた田舎道を1台の荷馬車がゆっくりと進んでいる。そして、荷台の上には、年のころ15、6の少女が2人乗っている。黒髪とダークブラウンの髪をした少女だ。2人とも蒼い修道服を身に付けている。

「リア姉さん起きて。もうすぐ着くわ」

「ルノア、あと5分」

「姉さん、5分も寝ていたら通り過ぎるわよ」

黒髪のルノアと呼ばれた少女はそう言うと、ダークブラウンの髪の少女、リアの耳をつかみ引っ張る。

「痛い、痛い。ルノアひどーい。あなたに、せつかくもらえた休暇なのに、孤児院で過ごすと言いだした妹を心配してついてきた姉に対する気遣いはないの?」

「私は姉さんのほうが心配。それに、あの孤児院は私たちが初めて出合った場所だから……」

「まあ、神官になったらいつ帰れるかわからないからね」

そんなことを話しているうちに、馬車は小さな教会についた。

「小父^{ちち}さま、ありがとうございました。少ないですけどこれを」

ルノアは数枚の銀貨を農夫に渡そうとする。

「だめだあ、神官様からもらえねえ」

「神官と言ってもまだ見習いですし。これくらいしか出来ないうすから、受け取ってください」

ルノアの言葉に農夫は少し困った顔をしたが、いいことを思いついたという顔で笑った。

「だったら、わたらの安全と幸せを祈ってくれねえか。あんたみたいなべっぴんさんなら、きっと神様も聞き入れてくれるはずだあ」

頑として受け取らないので、ルノアは銀貨を引っ込め祈りをささげる事にした。

「ガイアよ。心やさしき者にガイアに加護があらんことを。ささやかな幸福が訪れんことを」

馬車の男は、祈りをささげて貰うと手を振って行ってしまった。

「帰ってきたわね、姉さん」

「3年ぶりか。疲れたから早くいこう」

腰にフレイルとハンドアックスを下げ、2メートル近いウォーハンマーを持ちたりアを見てルノアは呟いた。

「こんな所にまで、おもりを持つてくるからよ」

o p o 3 : 姉妹(後書き)

第3話投入。

予定では14話まであります。

1話1話は短いですけどね。

o p o 4 : 孤児院の王子様

孤児院の院長は快く2人を招き入れてくれた。もう50を過ぎて
いるはずだが、まだ40代前半で通りそうだ。この孤児院の院長に
なるまでは、神の奇跡、神聖魔法を使えないにもかかわらず教皇庁
で司祭長まで勤めた女性だ。

「2人ともよくきたわね、噂は聞いているわ。あのいたずらっ子だ
った2人が教皇庁から勧誘がきていると聞いたわよ」

院長は嬉しそうに笑う。

「あのー、実はその話、断わろうかと思っているのです」

ルノアが言いにくそうに言うが、院長はただ微笑んだ。

「やっぱりね。貴女達は教皇庁で大人しくしているガラじゃないも
の。で、どうするつもり？」

「ルノアは従軍神官の資格を取ったのですよ。私は宣教師になって
大陸中、旅をしようかと思っています」

院長が驚いた顔をする。

「まあ、2人とも離れ離れになるのね。大丈夫なの？ ルノア」

院長の脳裏には、リアの後について回る幼いルノアの姿が焼きつ
いていたのだろう。

「大丈夫ですよ院長先生。いつまでも子供じゃありません」

ルノアが頬を膨らませた。

「フフ、そうね」

院長とリアがルノアを見て笑う。

「ところで、どのぐらい居られるの？」

「はい。1ヶ月ほど」

ドアがノックされ1人の少女がティーポットとカップの乗ったワ
ゴンを押して入ってきた。年のころは14歳くらいで、金髪の髪を
短めのおさげにしている。アメジストのような紫の瞳が印象的だ。

「ミシエイル。ミシエイルよね。私よルノアよ」

ルノアが少女に抱きついた。

「ルノア姉さん…… それじゃあ、お客様って？」

「うん。リアも一緒よ。元気そうで良かった。あなたを置いていく形になったから心配していたのよ」

「大丈夫よ。ルノア姉さん。今は院長先生のお手伝いをしているの」「隙あり！」

突然、11、2歳ぐらいの男の子がミシエイルのスカートをめくった。

「きゃっ」

と悲鳴をあげて床にしゃがみこむミツシエイル。

「やリー、白だ！」

しかし、少年の喜びも長くは続かなかった。いつの間にか背後にまわったリアが、少年の首根っこを捕まえて持ち上げる。

「なんなの？ こいつ」

「はなせよ。この馬鹿力」

院長がこめかみを、押さえて言った。

「またあなたなの？ カイン。その子はこの国のリユーム国の第一王子なの」

「うそ！」

ルノアとリアがハモった。そして顔を見合わせて言った。

「冗談にしても、悪質だけど……」

「本当なら、この国、長くないと思う……」

どちらともなく、ため息をついた。

o p o 4 : 孤児院の王子様 (後書き)

第4話投入。

本文中の『従軍神官』の役職に関する説明は本編で行います。本編では重要な役職(そりゃ、第1章のメインヒロインの地位です)なので。

外伝では、役職名だけの登場ですね。

ちなみにサブタイトルの『o p』とは『オーパス』読み、音楽用語です。意味は『作品番号』となります。

たとえば、『o p 1』と表記されたときは『作品番号1』という意味です。

「王族だろうと、いたずらしたのは事実」

と、言うリアの一声で、カインは地下の食料貯蔵庫に閉じ込められた。

「側室のレティア様が、私の教え子なのは知っているわね？」

院長がルノアとリアに聞く。

「確か従軍神官で、カーライル王に見初められて側室に入った方ですわね？」

ルノアが聞き返す。

「そうよ。王妃ナルディア様に子供が居なかったから、レティア様の子カインが王位継承権第1位。しかし3年前にナルディア様に男児が生まれたからさー大変。庶民出のレティア様と隣国リリシアの姫君のナルディア様。どちらのお子を王位につけたいか、と聞かれたこの国の貴族達はナルディア様に転んだ」

「でも、王位継承権は一度定まったら、決めた王様でも変更できないはずじゃ」

「良く勉強しているわね、ルノア。その通りよ。けど順位を繰り上げる方法があるの」

今まで黙って聞いていたリアが声をあげる

「暗殺！」

「それだけじゃないけど、正解。事故、病死、なんでもいいわ。とにかく自分より継承権が上位の者が死ねばいいの」

「それじゃ、黒幕はナルディア様？」

「多分違うわよ。リア姉さん。ナルディアさまは、とてもお優しい人だという評判よ。悪く言う人を聞いたことないわ。良い噂より悪い噂のほうが広がるのが速いから、多分うわさ通りの人よ」

実際にリユーム国から帰ってきた従軍神官達も、ナルディア様とレティア様のことを悪く言う人はいなかった。カーライル王の酒好

きと女好きは有名で、気をつける！ 孕まされるぞ。などと云う者はいたが……

「じゃあ、誰よ」

「多分、バルディア公爵よ。彼は、以前からナルディア様の子を王位につけたがっていたから。ガチガチの選民思想の持ち主よ。カイルは今まで4回アツサシンに襲われているわ。レティア様が守ったけど、この間とうとう重傷を負ったの。一応、特殊部隊、王室の盾が動いているけどじきに圧力がかかるでしょうね。それで、レティア様が私に預けた訳だけど…… 私も歳だしあなた達が居るときで助かったわ」

院長先生が両手を合わせてうれしそうに言う。

「やっぱり、そうなりますか？」

「それじゃ、見捨てるつもり？」

そう切り替えされては、リアも何もいえない。

「院長先生にはかなわないわよ、リア姉さん。全力を尽くしますが、城からの護衛は居ないのでですか？」

院長がため息をつきながら言う。

「貴女たちがいたらすぐに治療できたのでしようけど、あの子がみんな病院に送ったわ。あんな風でも王族ね、人心掌握に長けているわ。孤児院の子達をつかって落とし穴を作ったの。しかも毒蛇入りのね。あの子も自分が狙われている自覚あるでしょうに……」

はあ。と、今度は三人でため息をついた。

o p o 5 : お家騒動(後書き)

読んでいただいていただけに感謝。

ま、お家騒動の形式としてはよくある形です。黒幕が正室ではなくて門閥貴族というところだけ違いますけど。

「リア姉さん、ちょっと、カインの所に行ってくるわ」

「なんで？ ある意味、地下室になっている場所だから安全だよ」

「でも、ご飯くらい食べさせてあげないと」

リアが、ルノアの持っているトレイを覗き込む。

「あ、トマトスープ」

「姉さんの分は食堂にあるわよ」

トマトスープはリアの好物だ。幼い頃、トマトが苦手だったルノアは、よくリアに片付けて貰っていた。

「本当？ それじゃ行ってくる」

言い終わる前にリアが居なくなる。そんな姉の様子を見てルノアはクスリと笑った。

「カイン、大丈夫？」

木製の階段を下り、扉を開けると部屋の隅で膝を抱えて座っているカインが居た。

「夕飯よ。食べたら」

カインの目の前にトレイを置くが、カインはちらつと見ただけで手をつけようとしない。

ルノアも、無理にすすめずにカインの隣に腰をおろす。

「あと2、3時間辛抱なさい。ミッシェイルが泣いちゃったし、リア姉さんにも掛け合っただけ」

それだけ言うとルノアも黙る

5分ほどそうやって座っていたらどうか。カインのほうから口を開いた。

「城から何か、なかったか？」

「レティアさまなら、回復に向かっているそうよ」

「そうか。おまえもあっちに行けよ。僕にかまうな。母上のように巻き込まれるぞ」

ルノアがカインの顔を覗き込む。

「護衛の人を病院送りにしたり、嫌われる言動ってわざと？」

「うるさい！ あっちいけ！」

薄暗くてわかりにくいのがカインの顔が赤くなっている。黙り込むカイン。また5分ほど時間が流れる。

「どうして？ 教えてくれない？ 教えてくれなくても私たちのやることは変わらないけど、教えてくれたほうがうれしいわ」

薄暗い中30分ほど、黙って座っていただろうか。

「……この間襲われた時、カリオが死んだ。ああ、カリオはずっと僕の護衛をしてくれていて、先日子供が生まれたと、とっても喜んでいた。でも僕の変わりに暗殺者の刃を受けて…… 死ぬ直前も、僕に怪我はないかって言って…… 本当は他に言い残すべき事があったはずなのに…… 僕の顔を見て怪我はありませんかって、笑ったんだ……」

カインが、涙を隠そうと顔をこする。

「僕は何も出来ないのに。母上にもカリオにも。僕は…… 何もできない」

カインの泣き声が地下倉庫に響く。しばらくしてルノアが口を開く。

「私ね、カインより小さい時に、両親を亡くしたの。私と村を山賊から守ろうとして、結局返り討ちにあって、私も斬られちゃった。今でもね、背中に斬られた跡が残っているの」

ルノアはカインの顔を覗き込んで、少しだけ微笑んでみせた。

「そのあとは死ぬことばかり考えていた。でも、ここに来てある女の子に会ったの。その子は、私に生きなきゃいけない。って言ったの。私を助けようとした人の為に生きて幸せにならないと、いけな

「いつて」

ルノアはカインの瞳を真っ直ぐ見つめる。

「カイン。貴方もそうだと思う。レティア様やカリオは貴方を愛している。貴方はその分幸せにならないといけないし、生きなければならぬ。それが命を助けてもらった者の義務」

「僕は、カリオや母上のように強くなれるかな？ いつか、誰かを守れるように強く」

ルノアは、カインの頭をクシャクシャと掻き回した。

「大きく出たわね。カイン王子。大丈夫よ。その思いを忘れなければ、貴方はたくさんの人を守る」

「ねえ、ある女の子って？」

「うん、フェンリア」ヒルデガルドと言うの。みんなはリアって呼ぶわ」

ルノアはカインの手を引いて立ち上がらせる。

「さあ、上に行こう。まずミシエイルに謝らないとね」

o p o 6 : 王子の気持ち (後書き)

カイン王子、実はいい子ちゃんでした(笑
ただのクソガキじゃなかったのですねえ。

彼には本編で名君の資質を示していただかなければいけませんから。

登場人物ですが、ルノアだけが本編1章で登場です。(1章のヒロ
インです)

フェンリア(リア)、カーライン(カイン王子)、ミシエイルの3
人は本編2章からの登場です。

「ルノアお姉ちゃん。大変だよ」

地下室から廊下に出てきたところで、5歳くらいの女の子がルノアに飛びついてきた。

「エナ、どうしたの」

ルノアは女の子の前にしゃがんで、目線の高さを合わせる。

「食堂でミシエイルお姉ちゃんが、大変だよ」

「カイン。この子をお願い」

女の子をカインに預けると、食堂に向かい走り出した。

食堂の前に行くと、子供達が廊下に固まっていた。

「みんな、お願いだから部屋に戻っていて。年長の子は小さい子供達をお願いね。あとカギは閉めるのよ」

ルノアの言葉を聞いた子供達は、しびしび部屋に戻っていく。入り口に向かうと、院長とリアが並んで立っていた。部屋の中には顔に布を巻いて隠した女が、ミシエイルの首筋に銀色に光るダガーを当てている。ミシエイルは恐怖の為か身動きひとつしない。

「院長、リア姉さん、どうしたの？」

「ごめん。私がついていながらミシエイルを人質に取られてしまった」

視線は女とミシエイルに向けたまま短く応える。

「そこ、何をこそ話している。早く王子を連れて来い」

女がイライラした様子で言う

「院長、行ってきます」

リアと院長が止める間もなく、ルノアは食堂の中に歩を進める。

「きさま、何のつもりだ。こいつがどうなってもいいのか」

「落ち着いて、私はガイア教の神官見習いのルノア。ほら、武器も持っていないわ」

そう言って修道服の上着を脱ぎ、両腕を開いて武器を隠し持っていないことをアピールする。

「ル、ルノア姉さん」

ミシエイルは、今にも泣きそうな声でルノアを呼ぶ。

「ミシエイル。大丈夫だから、助けてあげるからね」

ルノアはミシエイルに向かい、いつもの微笑を向ける。

「ねえ、その娘を放してもらえないかしら。代わりに私が人質になるわ」

そして、1歩踏み出す。

「よ、よるな。本当に刺すぞ!」

女は後ずさりながらミシエイルの細い首に、ますますダガーを食い込ませる。

「何を怖がっているの？ ミシエイルも私も武器ひとつ持っていないわ」

「それ以上近づくな。王子を出せ」

ルノアが立ち止まる。

「ルノア。どいて!」

突然、食堂にカインが入ってきた。リアと院長の脇をすり抜けたらしい。

「カイン。何を」

「僕は強くなりたい。もう誰かに守られてばかりなのは嫌だ。おい！ 僕が、王位継承権第1位、カーライン・リュティアだ。その娘を放せ!」

女が戸惑っているのが分かる。まさか本当に本人が出てくると思わなかったのだろう。

「どうした？ もしかしてターゲットの顔も知らずに来たのか？ それでも特徴ぐらいは知っているのだろう?」

大人びた口調で挑発する。その隙にリアと院長が部屋の左右から

ゆっくりと回りこむ。

「この二人動くな！」

女はリアと院長を威嚇し、ゆっくりと窓のほうに移動する。

「王子、1時間後。ターシャスの森の入口まで1人で来い。それまで、この娘は預かる」

そう言つと、床に何かを叩きつける。同時に閃光が視界を塞いだ。

o p o 7 : 暗殺者 (後書き)

初手からの暗殺失敗 (笑)

その後もグダグダで、まさに泥縄 (笑)

どういう状況で暗殺者が発見されたのだから、非常に興味あります。
天井からポテツと落ちてきたのだったりして (笑)

でも人質取られてしまいました。無事奪還できますか。
というか、前回のあとがきでバレバレですね。

「カイン！待ちなさい」

外に飛び出そうとしたカインを、リアが捕まえた。

「待ちなさい。行くのは準備が終わってからよ。それに、相手はプロじゃないから何とかなると思う」

カインがリアの手を振り解こうと暴れる。

「なぜ、そんなことが分かる」

「プロだったら人質を取ったりしないわよ。強行なんかしないで見つけた時点で引いているわ。それに、歩いて15分足らずの場所に行くのに1時間くれたのよ、有効に使わなきゃ」

そこにルノアがリアのカバンを抱えて戻ってきた。

「相変わらず、いろいろ入っているわね」

「備えあれば憂い無し、てね」

カバンを開くと小さ目の武具や武器がぎっしり入っている。リアが趣味と実益を兼ねて集めているコレクションの一部だ。教団の上層部は良い顔はしないが、武器のコレクションを禁止した規則が無いため黙認状態だ。

「ルノア、ガントレットぐらい付けたら？ 私は鎧を着てきたし」

「鎧着ているのに、何故こんなもの持っているのよ？」

「趣味よ」

きっぱりと言い切るリア。そして、カインに細身のショートソードとダガーを渡す。

「カイン。暗殺者の相手は、私たちがする。貴方の役目はおとりとミシエイルを守ること。いいわね？」

「僕にも、戦わせてくれ」

「駄目よ。狙いは貴方だと言うことを忘れないで」

カインはまだ不満そうだ。そんなカインにルノアが静かに言う。

「私からも一つ。カイン、自己犠牲は駄目よ。貴方が死んで命が助

かっでも誰も喜ばないわ。貴方はその辛さを知っているわね。ギリギリまで生き残る事を優先しなさい」

「ルノア達は？」

その問いにはリアが答える。

「安心なさい。危なくなったら貴方を置いて逃げるから」

「ちよつと姉さん」

リアはルノアを無視して続ける。

「だから、貴方も危ないと思ったら逃げなさい。あ、でもミシエイルは連れて逃げてね。なんて顔しているのよ。私達が死んだら、貴方はともかくミシエイルが、悲しむじゃない」

それだけ言うと、鎧の装着を始める。

「カインごめんね。リア姉さん、あんな言い方しか出来ないから…」

…でも、約束。必ず4人でここに帰ってこようね」

ルノアが差し出した小指にカインが小指を絡めた。

oppo8：約束（後書き）

よし、半分以上更新完了。というわけで第8部をお届けします。
全14話の予定）

フェンリア！お前何者？ という感じのoppo8でした。
フェンリアには後に『剣（なぐさ）の神官』というふたつ名が付きます。
ルノアふたつ名は『蒼（あお）の聖女』です。

聖魔戦記では、基本的に戦闘を行うメインキャラにはふたつ名を与えていこうと思っています。

笑 次の更新は、お昼前になると思います。ひとまずお休みなさい）

ターシャスの森の入口についたのは、指定時間の20分前だ。緊張をほぐそうと持ってきた水筒に口をつける。

「速かったな、カイン王子」

月明かりの下、縛られたミシエイルを連れた女暗殺者が現れる。

「だめ！ 逃げて！」

女が叫ぶミシエイルのみぞおちを鞘で突く。ミシエイルが地面に崩れ落ちる。

「その娘に、乱暴はするな」

「余計なことを言わなければ乱暴はしないさ。それより自分の身を案じたほうがいいと思うけど」

言い終わる前に女が間合いを詰め、剣を振るう。剣を抜く間のないカインは、剣の鞘でどうにか受け止めるが、細身のカインとは体格差が有り過ぎた。後ろに弾き飛ばされ仰向けに倒れる。

カインの目の前に剣の切っ先が突きつけられた。

「本当に来るとは思わなかったよ。たかが孤児の女の子を救う為に出て来るなんて。王族としては失格だろうけど、嫌いじゃないよ、あんたみたいなき子」

「自分を殺そうとしている人に言われても嬉しくないね」
なるべく平静な顔をして減らず口をたたく。

「それじゃ、死になさい！」

ガツキン、女の構えた剣が弾かれように跳ね上がる。

「プロ目指すなら獲物を前に舌なめずりしてはいけないわよ。こうして邪魔されるからね」

ウォーハンマーを構えたリアの姿が浮かびあがる。

「く、魔法を使える人間がいるのか」

「ええ、ガイア様に愛された娘がね。カイン。ミシエイルを頼んだ」
「よ」

カインがミシエイルに向かい走る。それを追おうとした女の前にリアが立ちはだかる。

「あなたの相手は私。逃がさないから」

「ミシエイル大丈夫？」

苦しげにうめくミシエイルを抱き起こし縄をダガーで切る。

「すまない。君を巻き込んでしまった。許してくれ」

「あ、危ない…… 逃げて」

ミシエイルの呟きと共にパシツと軽い音がして、折れた矢がカインの足元に落ちる。

「隠れていて正解だったわね。カイン、向こうにある岩の陰にミシエイルを連れて行きなさい」

カインがミシエイルを抱えて岩陰に隠れるのを確認してから、森の奥に隠れている暗殺者に向き直りショートソードを左右の手に持つ。

「ガイア教の神官戦士を相手にするなら、魔法のことも頭に入れることね。飛び道具はきかないわよ」

黒装束に身を包んだ男が現れた。

「まだ、いるかもしれないぞ。可愛い神官さん」

男が馬鹿にした声で言う。

「あいにく様。岩の周りには結界を張っているから、私を倒さないと2人には手出し出来ないわよ」

「く、ならば死ね！」

男が剣を振り上げた。

o p o g : : 対峙 (後書き)

カイン王子がんばるの図)笑

さて、このままラストまで連続更新していきます。

op10：カインとミシエイル

ミシエイルを抱えるようにして、ルノアに指定された岩陰に走りこむ。

「ミシエイル。怪我はないか？」

息を切らせながらカインが訊ねる。

「……うん」

「そうか。よかった」

カインの顔に笑みが浮かぶ。それに対してミシエイルが困惑した表情を浮かべた。

「何故？ 何故、助けに来たの？」

「何故つて、助けにこないか、こんな場合」

「私はただの孤児で、貴方は一国の王子なのよ。普通なら助けにならないてこないわ」

「ルノアやフェンリアが、君を見捨てるわけがないじゃないか。それに僕は君に謝らなければならないこともある。理由なんてそれだけで十分だ」

カインは剣を握りなおすと立ち上がる。

「降りかかる火の粉ぐらいは、自分で何とかしないと」

「だめ！」

ルノア達の所へ戻ろうとしたカインの腰にミシエイルが抱きついて止める。

「だめ！ 狙われているのはあなたよ。姉さん達は強いから信じてあげてお願い」

ミシエイルはじっとカインの瞳を見つめる。

「……………わかった。2人を信じることにしよう」

ため息をついてその場に目を瞑り座る。沈黙が降りる。ミシエイルがカインの顔を見つめる。

「あ、あのな。そう見つめられると、落ち着かないのだが……」

「ごめんなさい。昼間と感じが違ったから」

「いつもはこんなだよ。周りは大人だけだし。昼間は少しやりすぎた。ごめん」

カインが頭を下げる。

「え、え、なんのこと？」

「昼間、スカートめくった事……殴られるぐらいはあると思っていたけど泣かれるとは思ってもいなかった。ごめん」

額を地面にこすりつけるような勢いで頭を下げる。それを見てミシエルの口元に笑みが浮かぶ。

「駄目じゃない。王子様がこんな孤児の娘に頭をさげちゃ……顔をあげてもう気にしていないから」

顔を上げニツと笑みを浮かべるカイン。

「本当か？ よかった。あとは4人で帰ることができるといいな」

「うん……」

ミシエイルは笑って頷いた。

o p 1 0 : カインとミシエイル (後書き)

2人とも初々しいたら (笑)

どんどんいきましよう。

op11：戦闘 ルノア

男の剣戟が頭のすぐ上を通り過ぎる。ルノアはしゃがんだ姿勢から右手の小剣を男の喉元を狙って突き出すが避けられてしまう。

相手をプロの暗殺者ではないと確信したことから、ルノアは相手の力量を見誤った。確かに暗殺者としては素人だが、剣の腕はルノアより遙かに上だ。太刀筋からすると我流ではなく正規の訓練を受けたものだとわかる。

ギン！ルノアは男が突き出した剣を左手の小剣を使い受け流す。ルノアは素直に男を強いと感じる。どうにか互角に戦うことが出来ていのは、魔法で自分の身体能力を強化しているからに過ぎない。魔法がなければ、2、3合剣を合わせて時点で斬りたおされていたはずだ。

「何故、貴方ほどの剣の使い手が暗殺などに手を染めるのです」
距離を取り、剣を下げたルノアの姿に男の動きが止まった。

「王国の為だ」

「正式に定められた王位継承者を、庶子出というだけで排除することがが王国のためですか？」

「見解の相違だな。互いに信じる正義が違うのだ。私を否定するなら剣で叩き伏せるがいい」

「貴方達のように、何でも力で収めようとする人達がいるから！」

「力なき正義は絵に書かれた餅だ。そなたの正義を作る力、守る力を見せなければ、誰がついてこよう」

男が剣を構える。

「さあ、そなたの正義を示してみろ」

男の鋭い一撃。ルノアは小剣をクロスさせ受け止める。つば競り合いの後、剣を後ろに受け流し体勢の崩れた男のわき腹に蹴りを叩き込む。魔法で強化された脚にあばら骨を砕いた感触が伝わる。

「やるじゃないか。だが、私も後に引く訳にはいかんだ」

男の嵐のような連激が襲う。左右の小剣で受け流すが、どんどん男の剣戟がスピードを増す。そして捌き損ねた一撃が、右手の小剣を弾き飛ばしガントレットで止まる。ルノアは唇を噛み、痛みをこらえると男との距離をとる。折れてはいないがひびくらは入っただろう。

男も追い討ちをかける余力は無かったようだ、剣こそ構えているが肩で息をしている。そしてルノアは覚悟を決めた。魔法の呪文ルイン スベルを詠唱する。

「我、求めるは、戦乙女の槍。十二本の断罪の槍」
「させるか！」

呪文詠唱に気が付いた男が剣を構え突っ込んでくる。だが魔法の発動の方が早かった。男の足元が爆ぜ、男は爆風で飛ばされ、地面に叩きつけられる。

「もう、やめませんか」
ルノアの静かな声が響く。その周りには白い耀きに包まれた、十本の槍が浮いている。

『戦乙女の槍』ガイア教の神官戦士が使う最大級の攻撃呪文だ。月明かりの下でなければ使えないという条件などもあるが、その攻撃力は最大に設定した場合。小さい筈なら完全破壊できる。最小の攻撃力でも直撃を受ければ完全武装の騎士が跡形もなく吹き飛ばす。

「これがあなたの言う私の持つ最大の力です。この力では私の正義を守る力にはなりませんか？」

男が剣を杖代わりに立ち上がる。
「動かないで下さい。次は当てます」

男は剣を構えることはせず、鞘に収めた。

「私の負けだ。好きにするがよい」

男は自分の剣をルノアに渡した。

op11：戦闘 ルノア（後書き）

ルノアの戦闘シーン。本編第1章の第2話（第3部）でもそうですが、この娘は魔法と剣を併用して戦うスタイルです。

好む武器は小剣。ショートソード

そして今回使用した魔法『戦乙女の槍』は『メテオストライク』（第3章にて登場予定）に匹敵する破壊力を持つ魔法という設定です。（今回は詳しい説明を省いています）

設定時の使用条件は

- 1 月が出ていないと使用できない（ガンダムXのあれですね）
- 2 通常複数の神官にて発動する魔法

条件の2に関しては、そのうち本編で説明する予定ですが、簡単に言うと本人の資質です。

この魔法の説明を詳しくやると『重複詠唱』やら『略式詠唱』やら、これだけで1話分のスペース取りますので。

月下、女暗殺者の持つ剣が妖しげな銀光を放つ。リアは鋭い攻撃はウォーハンマーの柄で受けフェイントの軽い攻撃は鎧の防御力に頼り当たるに任せる。隙を見て攻撃を仕掛けるが捕らえることが出来ない。

元々、ウォーハンマーは身軽な者に対する武器ではない。基本的に円の動きでの攻撃に加え、ある程度の間合いが必要になるために懐に入られると攻撃できないのだ。

ドス！避けられたウォーハンマーが地面にめり込む。リアはウォーハンマーから手を放し、腰からハンドアックスを抜いた。

甲高い金属音が断続的に響く。軽快な動きで攻撃を加える女暗殺者、しかし重い板金鎧プレートメイルを着たまま、その動きについていくリアも普通じゃない。こうなると、防御力では圧倒的に有利なのだが、持久力では女暗殺者の方が有利だ。

決定打をあたえられぬまま、女暗殺者が間合いを取ろうとする。しかしリアがそれを阻止する。肩あての裏に装着した投げナイフを牽制に投げて女暗殺者の足を止める。

「なんで、神官が私より武器を携帯している？」

女暗殺者がリアに履き捨てるように言う。

「ふん、趣味よ」

リアも負けていない。すかさず言い返す。

女暗殺者が、リアのハンドアックスを剣で受け止める。リアはそのまま体重をかけ押し切ろうと力をこめる。

「さつさと降伏しなさい。ガイアの名において命の保障はするから」
「失敗したら、反逆罪でどのみち死刑だ」

「だから、ガイア教団が身柄を預かるといつているのよ。暗殺が成功したならまだしも、今なら未遂じゃない。身柄を引き渡すことはないわ」

「そんなことを言っつて私を騙すつもりか？」

女が剣を押し上げる。

「まさか、もちろん黒幕の正体は話してもらおうし、黒幕の裁判では証言してもらおう。あなたにも罪は償ってもらおうよ。命の保障はするけど甘く考えないことね」

「……………」

「あなたね。少しは人の言うことを信じなさい」

リアが女暗殺者を突き飛ばし距離をとる。そして、ハンドアックスを足元に落とすと背中から１メートル20センチほどの剣を引き抜く。剣の峰にサメの歯のようなノギリ状の大刃がついている。

「ソードブレイカー、私たちガイア教神官戦士の標準武装よ」

突如、爆発音が響きわたる。目の端で音のした方をみるとルノアの周りに白く耀く槍が浮いていた。

「あつちは、終わったようね」

言い終わる前に女暗殺者が間合いを詰めてきた。リアはその剣を剣の峰で受け止め、ノギリ大刃の間に絡め取り、ぐいっとねじるとたん、剣が澄んだ音をたてて折れた。

「言っただでしょう。ソードブレイカーだと…… さあ、どうするの？ 次は素手でやる？」

女暗殺者がキツとリアを睨む。

「こっとなったら、あなたが折れるまで付き合おう。やるなら立ちなさい」

リアはソードブレイカーを鞘に収めて拳を突き出した。

op12：戦闘 フェンリア（後書き）

フェンリアの戦闘スタイルは、魔法は使わない通常戦闘です。ただ武器使用のエキスパートでありこだわって使用する武器が無いということでしょうか。

あえてあげるなら『己の拳』^{「ぶこ}かな（笑

もちろんフェンリアも魔法使えますよ。ルノアのように複数の術者で起動させる魔法を1人で発動させたり、複数の魔法を同時展開することは出来ませんが。

それからガイア教の神官戦士の標準武装『ソードブレイカー』ですが、実際に存在するソードブレイカーとは別物です。（機能と目的は一緒ですが）

実在するものは全長40センチほどの片手で盾代わりとして扱う小剣で、折れる剣もレイピアやサーベルなどの細身の剣に限られます。作中のように通常の剣を叩き折ることは出来ません。

op13：後始末

「爆裂スーパーアトミックハリケーンフエンリアパンチ」

どの辺が、『爆裂』で『スーパー』で『アトミック』で『ハリケーン』なのだかは分からないが、リアの拳が女暗殺者のボディに突き刺さる。見た目はただの（少々鋭い）パンチにしか見えないが、威力は相当あつたらしい。女暗殺者は地に臥す。

だが、女の目はまだ死んでいない。動かない身体を必死に動かしてキツとリアを睨む。

「なにが、あんたをそこまでさせるの？ あなたが政治的意図で動いているようにはみえないけど？」

女が苦痛に顔をゆがめながら立ち上がる。リアもため息をつきながら構える。さつきから弱い者いじめをしているようで気分が悪い。

「もうよい、エリア」

黒装束に身を包んだ男が女の肩を掴み止めた。

「フ란ツ様……」

そこにルノアがゆっくりと歩いてくる。周りに浮いている『戦乙女の槍』のおかげで周りは昼間のように明るい。

「彼女はフ란ツさんのところの騎士見習だそうよ。今回も彼の為に働いたみたいね」

「そう…… それじゃ、私のほうで治療をしておくわ。ところでルノア、その槍しまつたら」

しかし、ルノアは真っ暗な森を見据えると静かに言った。

「まだ、終わっていないもの……」

それを、聞いて驚いたのはフ란ツだ。

「馬鹿な。暗殺命令を受けたのは我等だけのはず」

「それはあれね。見張りと始末屋。失敗しても成功しても二人とも始末したら死人に口無し。ところで全員捕捉しているの？」

「うん、5人よ」

『戦乙女の槍』が5本動き出した。森の奥に向かい飛んでいく。しばらくすると、森の中に爆発音が響く。さらに2本……そして、爆発音が響いた。

「リア姉さん。後はお願いね、魔法使い過ぎたわ」

ぽてつ。とルノアは倒れた。

「ちよつとルノア。後始末、全部私がやるの？　ちよつと起きなさい」

リアは叫ぶがルノアは起きない。当たり前だ、魔法を使いすぎて精神力を使い切ったのだから回復するまで目覚めない。

「こつなつたらエリアと言ったわね。治療してあげるからこつちにきなさい。終わったら後始末手伝ってもらわよ。フランツさんもね！」

リアはぶつぶつ言いながらも2人の治療を始めた。

op13：後始末（後書き）

爆裂スーパーアトミックハリケーンフェンリアパンチ！（笑）

キーワードの「コメディー」にチェックしたのに、笑いが少なかったので（笑）

反省はしているが後悔はしていない（笑）

はっきり言って、ステプリ（某テニスアニメではありません。あのアニメの必殺技もあれですが……）のパクリです。小説の第1巻だったかな？ 確か……

アニメ、魔法戦士リウイの『リウイパンチ！』でもいいですけど。

書いたときにはルノアの『ぽてっ』にも萌えたものですが（笑）
本編のルノアは生真面目だから。

では、次で大円満です。

op14：新たな旅立ち

あれから2週間たった。

ガイア教団からの告発を受けて、リユーム王国、国王カーライルが、バルディア公の捕縛を命じたのが、事件からわずか二日後のことだった。

これだけすばやく行動に移せたのは、フランツ、エリア両証人と5人の逮捕者（運良く命には別状無かった）があったことが大きい。バルディア公は貴族ゆえ死刑にはできないが、恐らく死を賜ることになるだろう。どんなに軽くても財産没収のうえ国外追放か。

「リア姉さん、荷造りは終わった？」

ルノアが部屋の外からリアに声をかける。そしてドアを開けると荷物を詰め込もうとカバンと格闘しているリアがいた。なんだか知らないが、ルノアのみたことの無い武器とかがベッドの上に並べてある。旅の行商人から買い込んだらしい。

「姉さん、確か教団に戻ったら宣教師として旅立つと言わなかった？」

ルノアとリアは、今回の功績のおかげで神官任命後の進路希望を優先する。という決定を受けた。ルノアは従軍神官としてリユーム王国に派遣が決まり、リアも宣教師として旅立つことが決まっている。ガイア教団の総本山でもある教皇庁からの誘いも、再三あったのだが結局は断った。

「そうだけど……」

「それならコレクシオンは、院長に預けたらどう？　いくらなんでもコレクシオンを持って旅には出られないわよ」

「うう、そうだわ」

リアは武器を抱えて部屋を出て行った。院長の所だろう。ルノアは残った荷物をカバンに詰め込む。そこにカインとミシエイルが入ってきた。この2人、あの日以来、仲がいいというか恋人同士のようだ。

「ルノア姉さん、もう行くの？」

ミシエイルが悲しそうな顔をしている。

「なんて顔しているのよ。私は同じ国にいるから、休暇のたびに遊びにくるわよ。カインとは顔を合わすことが多くなるわね」

「そうだね。僕も明日には城に戻るよ。ミシエイルも連れて行きたいのだけど、本人が嫌だというから文通からだ」

ここ2日ほどカインがミシエイルを城にこないかと誘っていたのは知っていた。カインの真意はわからないが、ミシエイルは孤児院に残ることを選んだ。だがカインはまだ諦めてはいないようだ。

ルノアは、カインに耳打ちする。

「カイン。ミシエイル泣かすようなことしたら許さないから。もし泣かしたら叱り飛ばしにくるわよ」

「努力するよ。ルノアはともかくリアだと命に関わる」

ルノアとカインは顔を見合わせて笑う。ミシエイルにも聞こえたらしく顔を赤くしている。

院長やミシエイル、それにカインや孤児院の子供達に見送られて、リューム王国が用意した馬車に乗り込んだ。次にここに来ることが出来るのも早くて半年後だ。下手をすれば、一年は帰ってこれない。そんなことを考えているうちに馬車が動き出した。孤児院がどんどん小さくなっていく。

「ねえ、リア姉さん。私たち8年も一緒に居たんだよね」

「なによ、いきなり？」

リアは目を閉じたまま答えた。

「私達は一人じゃない。あなたには私が、私にはあなたがいる。忘れないで…… 覚えている？」

ルノアは、8年前のリアのセリフを言う。

「私、そんな恥ずかしい事を言ったかしら」

「うん、言った。でも両親を殺されて、死ぬことばかり考えていた私には、それが救いだっただ」

リアがルノアを後ろから抱きしめる。

「ルノア…… 私も、あなたのおかげでずいぶん救われたわ。恥ずかしいついでにいいかな？」

リアが微笑む。

「どんなに離れた場所にいても、私はあなたの幸せを祈っている。本当よ。私の可愛い妹だもの」

この後、違う道を歩み始めた2人が再会するまでに5年の月日が必要となる。

それは、別の風が運ぶ物語。

op14：新たな旅立ち（後書き）

財産募集ってなんじゃそりゃ！（笑）
ちゃんと財産没収に直しました。

誤字脱字の指摘は喜んでお受けします。もちろん批評も酷評も喜んで受ける所存。

無事、大円満を迎えました外伝1です。

私の場合、長編を書くときメインキャラの過去まで設定しますので、本編より前のエピソードが作りやすいです。

元々、本編であり連載中の『聖魔戦記 前奏曲』自体、学生時代に書いた『聖魔戦記 恋歌』という話のスピノフですし。

恋歌本編より、設定集のボリュームが2倍以上あるという異常事態（笑）

つまり前奏曲はスター・ウォーズ エピソード123のあつかいですね（笑）

ここまで読んでいた方に感謝を。『ありがとうございました』

本編まで読んでいただいた方には更なる感謝を。

といっても、3部までしか更新してませんが（笑）

そして評価感想をくださいました方（今からくれる方）には深い感謝を申し上げてシメさせていただきます。

愚作にお付き合いいただきありがとうございます。

2007.11.18 15:27

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0631d/>

聖魔戦記外伝1 神官姉妹と王子様

2010年10月8日14時52分発行